

## 都民の生活実態と意識

### ●都民の暮らしや意識についての調査

東京都では、都内の各世帯および世帯員の生活実態と「福祉のまちづくり」などに関する意識を把握することにより、福祉・保健施策の充実のための基礎資料とすることを目的に、『都民の生活実態と意識』調査を実施しています。先日、同調査の平成28年度の結果(速報)がまとめられましたので、主な内容についてみていきます。

### ●福祉の観点から見た東京

『都民の生活実態と意識』調査は、昭和56年度から5年毎に実施されており、8回目となる今回は、平成28年10月12日～11月11日の間に調査が行われました。調査対象者は、都内に居住する6,000世帯および調査基準日現在、満20歳以上の世帯員です。

調査項目は、年齢や性別、世帯構成をはじめ、就業、住居、経済、介護の状況など多岐にわたりますが、今回は「福祉のまちづくり」の視点でみていきます。

まず、現在の東京のまちにおける建物、道路、駅、電車などの施設や設備のバリアフリー化の状況について聞いたところ、バリアフリー化が「進んでいる」と「やや進んでいる」の合計が48.4%、「進んでいない」と「あまり進んでいない」の合計が47.7%と、ほぼ同じ割合となりました。

また、外出時の状況について、「何らかの障害があるために、外出の際、福祉機器や介助者が必要である」人の割合は6.6%。「何らかの理由があるために、外出の際、周囲の支援や理解を必要とすることがある」人の割合は4.7%でした。

### ●日常の外出に不安や不便を感じる人は約4割

職場や学校、買い物先など、日常よく出かけるところに着くまでに、道路や駅、電車やバスなどでバリアフリー化が進んでいないために、不便や不安を感じる場所が「ある」人の割合は43.6%。不便や不安を感じる箇所は、「道路」の

割合が72.2%で最も高く、次いで公共交通施設(鉄道の駅、バス乗り場など)が65.9%でした。

過去1年程の間に、外出の際に高齢者、障害者、妊産婦、乳幼児を連れた方などが困っているのを見かけたり、出会ったりしたことが「ある」人のうち、「積極的に自ら手助けをした」(57.3%)または「相手から求められて手助けをした」(8.0%)人の割合は、合わせて65.3%でした。手助けをした内容は、「乗り物などで席を譲った」が62.6%、「扉を開けた」が34.3%、「車いすやベビーカーを押したり、持ち上げたりするのを手伝った」が33.9%、「道を教えた」が33.2%です。

### ●「障害者差別解消法」認知度は約5割

さらに、万一、災害が発生した場合、高齢者や障害者、乳幼児、妊産婦、外国人、病人、けが人など、ひとりで避難することが困難な方に対して、「進んで協力する」(30.5%)または「求められれば協力する」(46.8%)と答えた人の割合は77.2%でした。協力できる内容は、「避難場所への誘導」の割合が73.7%で最も高く、次いで「安否の確認」が66.8%です。

平成28年4月1日に不当な差別的取扱いを禁止する「障害者差別解消法」が施行されましたが、このことを「知っている」人の割合は47.2%でした。また、合理的配慮を提供するよう努めなければならないことを「知っている」人の割合は38.2%でした。

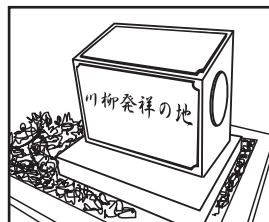
行政の施策として重要だと思うものは、「障害のある人への理解を深めるための教育および啓発・広報活動」の割合が最も高く、42.7%となりました。

今回の調査結果の詳細については、東京都ホームページ(<http://www.metro.tokyo.jp/tosei/hodohappyo/press/2017/03/29/16.html>)から「調査の概要」PDFがご覧いただけます。なお、調査内容についてのお問い合わせは、福祉保健局総務部総務課(03-5320-4011)までお願いします。

## 東京今昔物語 471

## 台東区、川柳が眠るまち

世相や日常を五・七・五に詠む川柳。東京メトロ浅草線「蔵前」駅の北西300m、台東区三筋2丁目に「川柳発祥の地」記念碑があります。川柳は、季語などの制限もなくテーマも身近なので、俳句や短歌よりは親しみやすい短詩ですが、もともとは七・七の題(前句)に五・七・五の句を付ける遊びから五・七・



五だけが独立したのだとか。江戸時代にこの形を広めた点者、柄井川柳(からいせんりゅう)の名から「川柳」と呼ばれるようになったそうです。川柳記念碑は2007年8月に「川柳誕生250年」を記念し、ここに立てられました。ちなみに、柄井川柳も近くの蔵前・龍宝寺の墓に眠っています。